第 23 回国際統一思想シンポジウム

「諸科学の統一と統一思想：統一思想に基づいた学問にむけて」

2011 年 12 月 9 日—12 月 11 日

千葉・浦安・一心教育院

統一科学と人間の起源

リチャード・ルイス, **PhD**
上席研究員, **UTI, USA**

統一思想研究院

序文

　これは私が執筆中の統一科学という本の最終章である。この本は統一神学校のジン学長によって依頼されたもので、学長は2012年末に出版を計画している。

　この最終章では人類学、言語学、病理学と心理学の要素を織り込みながら、統一科学の議論を結論づけ、人間の起源についての統一的な見方を示すと同時に堕落においてどんな劇的なことが起きたのかを示す。

　盲人と象の寓話におけるように、すべての異なる見方は、全体の像が現れた時に調和がとれる。

　ここでの考えは、さらなる議論の土台として提示されるもので、完結した非代替的なものとして提示されるものではない。

　私は建設的なご意見や議論を歓迎する。RICHARDLLL@MAC.COMに連絡をください。

リチャード・ルイス

2011年10月

＜＜統一思想＞＞

　統一思想における神と創造との関係は物質世界で起きたことを神はコントロールできないということだ。というのはデザインによって、神は真の愛を完成した人間が物質世界の主人になるように意図したからである。人間が登場する前、神は物質世界をロゴスを通して間接的に主管している。つまり、間接的主管圏にあるのである。

　真の人間が現れて真の愛をもって物質世界を主管する時、ロゴスは、太陽の熱核融合と

気候のように、創造の‘維持管理的’な側面を担い続ける。現代科学がロゴスに対して持っている最も近い概念は、“自然法則”である。

統一思想は、神の宇宙創造には２つの別個の段階があると強調する。これは前の統一思想国際（ＵＴＩ）会議で大谷明史氏によって議論され、彼の著書『ダーウィニズムを超えて：統一科学をめざして』の中で十分説明されている。この図は彼のＵＴＩ論文からのものである。

まずロゴスは上から始めて下へ、つまり人間から始めて動物を経て、細菌、元素と時空まで創造された。第２に、ロゴスはビッグバンにおける時空の創造をもって展開されるようになり、ロゴスは時間とともに段階的に、元素、細菌、動物を通して表出され、最終的に人間の誕生という完結した表現に達したのである。

この２つの段階の関係は、ベートーベンの心の中で『歓喜の歌』のアイデアが創造され、それを楽譜に書き、演奏するためにオーケストラを編成するのに傾けたエネルギーと努力というずっと簡単な関係に似ている。

＜＜ロゴスの役割＞＞

ロゴスが表出される様相は、生命系、非生命系の両方において基本的に同じである。唯一の根本的な違いは、生命系がデジタル記憶と系統という余分な段階をもっているということである。

＜＜非生命系＞＞

非生命系は物理学、化学、生化学で研究されており、内的な境界のある波と外的な相互作用し対をなすサブシステムからなる。「内的」「外的」という言葉は量子科学においては数学的に定義されている。内的な波は、大きさと角度をもつ複素数によって測られ、外的な波はただ、大きさを持つ実数によって測られる。内的な確率と、相互作用し対をなすサブシステムの外的な確率密度の関係は、外的な確率は内的な確率の二乗だということである。

ロゴスは直接、内的な波、量子確率波を決定するが、量子確率は、古典的な確率と質的

に異なるものである。内的な波は時間とともに外的な確率密度を決める。サブシステムの確率密度はそのシステムの形と機能を決める。

このようにしてロゴスは間接的に非生命系の外的な形と機能を決める。システムが創出する性質――個々のサブシステムが持っていないそれらの性質――は神がロゴスを創ったとき、神の心情からロゴスに投入した質感の表現なのである。

簡単なアナロジーは、ベートーベンが歓喜の歌のフィナーレを演奏するための指示を創造したとき、投入しその音楽に乗せた内心の命の喜びであろう。

これはロゴスと宇宙における非生命系の起源との間の関係を例示している。

＜＜ロゴスと生命系＞＞

非生命世界には起源となる出来事も系統もない。宇宙において最初のシステムの出現は第２、第３と続くシステムの出現と質的に何も変わりがない。宇宙における最初の金原子の出現は確かに最初の出来事はあったが、きょう巨大な星が最期を迎えたとき金原子が出現するのとまったく同じプロセスなのである。

生命系の起源となる出来事は非生命系に対してと同様に描くことができる。つまり、内的な波の側面にロゴスが影響を与えて、相互作用するシステムが新しい方向に

協力し、それらは１つの新しいシステムのサブシステムになるのである。相互作用する対をなすサブシステムというのは今度はアナログ・フォームを生じるデジタルな遺伝情報の領域である。その結果がロゴスから受け継いで創発した性質の新しいセットをもった新しい種である。ロゴスのこの直接の関与は、統一思想で『特別創造』と呼ばれているものである。

現生人類が登場する前に猿人や初期人類の段階を通ったけれども、それでも人間（アダムとエバ）が創造されたときには、巨大な飛躍があったに違いない。またアダムとエバは霊を吹き込まれたという点でまったく新しい創造であったということができる。

非生命系と生命系の大きな違いは第２、第３、第４と続く系の出現が最初の起源となる出来事と質的に異なるということである。ロゴスは直接関わっていない。最初のアナログ

波がサンプルとしてとられ、この波のデジタルな表現が長期的な遺伝記憶に書かれる。その波はこのデジタル記憶から任意に呼び出される。これはロゴスと共鳴しており、『特別創造』という起源に創発したすべての性質が保持されている。ロゴスは直接関わってない。というのは統一思想がその最初の存在の‘特別創造’と繁殖における‘普通の創造’とを区別しているからである。

短期の記憶を長期的な遺伝記憶の上に書き込むことはエピジェネティクスと呼ばれる：大きな前途が開けている新しく登場した科学である。アナログ波、エピジェネティクスとデジタル記憶の問題は前のＵＴＩ論文で詳細に議論された。このプロセスは、交響曲のアナログ波をデジタル情報としてＣＤディスクに記録し、ＣＤプレーヤーやスピーカーで再現することに似ている。

この書き込んだり読み込んだりするプロセスは、ダーウィニズムと遺伝学による唯物論的な総合説と区別するために、ラマルク説とエピジェネティクスのポストモダン総合説と呼ばれる。前者は読むプロセスだけを扱い、書くプロセスを扱っていない。セントラルドグマと呼ばれるものによって排除されているのである。これは、情報は遺伝子から体へ（遺伝型から表現型へ）と一方向にだけ流れると述べている。エピジェネティクスという新しい科学は唯物論的な進化思想に不可欠なこのドグマを否定している。

デジタル情報は複製され、系統を下降し、その波の形態が再現される。その波はロゴスを反映しているが、非生命系の場合と比べてより間接的である。

ロゴスについてのエピジェネティックな情報は系統を下降する中で蓄積され、種分化のプロセスの中で、最終的に遺伝物質の再編を方向づける。現代科学は種分化についてあいまいな理解しか持っていないが、エピジェネティックに方向づけられた種分化のメカニズムの概要が著者によって検討のため提案されている。

＜＜ロゴスの完結＞＞

ロゴスは日常的な言葉で細菌時代、原生生物時代、蛆虫（ぜん虫）時代、魚の時代、爬虫類の時代、哺乳類の時代、霊長類の出現と呼ばれるものを経て段階的に生命系で時間とともに順番に表出される。

この流れは前のＵＴＩセッションで概観した。

焦点は最後の段階にある。すなわち、最初の人間のペア、アダムとエバの誕生においてロゴスが完全な表現に到達するときである。統一思想は、神と１つになる最終段階は人間

の自由意志の創造的行動であり、成熟する中での人間の責任分担の完結であると述べている。

正確な流れはなお議論されているが、便宜上、人間の前の段階をネアンデルタール人と同じものとみることにしよう。

唯物論は、ネアンデルタール人から人間への移行は、一定の期間内に徐々に起きたことだとしている。神主義の科学はここで述べたように、特別な種分化が起きたと見る。つまり、環境を通してロゴスから収集された情報がネアンデルタール人の遺伝情報を人間のものに改変するよう方向づけたのである。一連の新しい資質は、“私は”が自分を意味するということを心に織り込むことも含め、ロゴスから受け継がれたのである。　私の本、「タンパク質はＲＮＡワールドでテレポートするのかーーバー・ボディと呼ばれる縮合染色体に関わるメカニズム」で蓄積されたエピジェネティックな情報によって方向づけられた普遍的な種分化の可能性のあるメカニズムを議論した。種分化という出来事は常に、オスとメスが関わっており、その結果が、アダムとエバの誕生だ。この名前は伝統的に人間始祖に対する呼び方である。

古典的な科学は、ネアンデルタール人から現世人類への移行は、ランダムな変異と生存闘争が原因だと述べている。この考え方についての現代の広報マンは、大谷氏のＵＴＩ論文で示されているようにリチャード・ドーキンズである。統一科学は系統を下降しながらロゴスから受け継がれた、蓄積された祖先の情報によって方向づけられた特別なメカニズムが原因で種分化が起きたとしている。

大変な努力でネアンデルタール人たちに習得された能力は、現世人類にも織り込まれたのである。一人の成人したネンデルタール人の精神能力は、現世人類の６歳の精神能力に匹敵していたが、彼らはそれ以上成長することはできなかった。一昔前の心理学であれば、彼らは痴愚者（白痴者より上で、軽愚者より下）と分類されていただろう。

ネアンデルタール人の中にもさまざまな人種がいたという証拠がある。彼らはさまざまな環境に適応し、集まり、人間に至る系統の中で‘彼らの知恵を蓄積’していっただろう。

ネアンデルタール人はおそらく、簡単な名詞と動詞による言語で会話し、火を起こすことを習得し、採集や狩猟に成功していた。最初の人間が生まれた時と場所は伝統的にエデンの園と呼ばれている。科学は最初の人間が登場した時期をおおまかに見積もっている。旧石器時代から新石器時代に移行する時である。

＜＜旧石器時代＞＞

およそ２５０万年続いた旧石器時代はネアンデルタール人が最も洗練された霊長類であった時代とみなせる。この非常に長い時期に起きた文化的変化は非常にゆっくりとして、徐々に起きた。火の制御した利用の仕方は４０万年前に現れた。石器の技術は何百万年もの間ほとんど変わらなかった。変わらないことが普通だったのだ。

死者を埋葬したり、調理のために火をおこしたりしていた考古学的証拠が残っている。彼らは共同体（氏族、民族レベル）で、おそらく簡単な名詞と動詞からなる原始的言語で話していた。彼らは簡単な石器や骨の道具を作った。３００万年前の火山灰の中で化石化したラエトリの足跡は、男性、女性と子供の前ネアンデルタール人の足跡であり、対による繁殖がこの時代にすでに確立されていたことを示す。

＜＜新石器時代＞＞

この百万年単位の平衡は、人間の出現と１０万年前から５万年前まで続いた新石器時代のスタートによって終わりを迎えた。

石や骨による道具の形は洗練され、装飾がほどこされた。彼らは構文と文法のある言語らしい言語を使った。狩猟・採集の段階は、農業の段階に入り、２万年以上前には家畜を飼い始め､最も悲惨なことに､１万４０００年前に一番古い戦いの証拠が見つかっている。

洞窟以外の場所への居住が進んだ。銅鉱石から銅を精錬し、その合金である青銅をつくる技術の発見が新石器時代に終わりをもたらし、青銅器時代が１万５０００年前に始まった。

何百万年も平衡が続いた旧石器時代と違って、何千年にもわたる劇的な変化が起きたということが新石器時代には普通のことだった。

人間の起源の場所、つまり、エデンの園については、すべて一致した別方向からの証拠によって確立されている。これらは言語の広がりの研究、ミトコンドリアを用いた女性系統の研究、Ｙ染色体を用いた男性系統の研究である。

＜１．女性系統＞

女性系統の歴史は、母から娘へ女性系統に受け継がれたミトコンドリア染色体における遺伝マーカーを追跡することによって、解明される。ミトコンドリアは男性によっては受け継がれない。ミトコンドリアが精子によって卵子に持ち込まれれば、即座に取り囲まれ破壊される。

この研究から得られた人間の移動のパターンは、東アフリカで始まり、そして、アフリカ南部と北方､そして全世界へ広がっていったというものである｡この起源となる女性は、文献の中で“ミトコンドリア・エバ”と呼ばれている。

＜２．男性系統＞

男性系統の歴史は、父から息子へと男性系統に受け継がれ、女性系統に受け継がれないＹ染色体の遺伝マーカーの拡大を追跡することで解明される。得られた人間の移動のパターンは、東アフリカで始まり、南部に広がるとともに、北方へそして全世界へ広がって行ったというものである。この起源となる男性は、“Ｙ染色体アダム”と

呼ばれている。徐々に種分化したという唯物論的な見方は、ミトコンドリア・エバとＹ染色体アダムは、“小さな繁殖する集団”だとみている。方向づけられた特別な種分化メカニズムの統一的な見方はこの集団はせいぜい二人だったとみている。

＜３．言語学＞

人間が東アフリカを出て、北へそして、全世界へ広がった中で、言語が時間とともにどのように変化していったかを探った研究は、以下のように述べている。

新しい言語分析は遺伝分析の方法を借りることでバベルの塔の話を書き換えようとして

いる。現代的な言語がサブサハラ・アフリカに起源をもち、人間集団の移動とともに世界に広がって行ったというのである。

三方向からの研究は、最初の人間が生まれたエデンというのは、１０万年前以降の東アフリカだったことを示す。皮膚の色に対する遺伝子の分析は、最初の人間は黒人で、黄色や白色の皮膚は人間が移動する中でずっと後に現れたということを示している。

ネアンデルタール人の異なる人種が水に適応した人種だけでなく、森やサバンナに適応した人種も含め、人間への途上で混合していたという証拠がある。そうした“混血”が起きる利点は、応用遺伝学において‘雑種強勢’と呼ばれる。

純粋に審美的な理由から、ネアンデルタール人の一団がキリマンジャロとアフリカ大湖沼の間の、ドラマティックで壮大な景色の場所に集まり、交配し、人間を生み出したという風に私は考えたい。

＜＜ロゴスの作用の完結＞＞

統一主義は最初の人間が成人の形で創造されたということは拒絶しており、今日、子供ができるのと同じように彼らは登場したという見方を受け入れている。基本的な生理学は今と同じものだったはずで、わたしたちはその状況を推論することができる。

これを考え合わせると、２段階目の創造、つまりロゴスの発現は、最初の二人の人間の誕生と、およそ６歳になってネアンデルタール人レベルの人格への成長することをもって完結したのだ。次に神が愛するように愛する能力をもって成熟するのは、彼らの創造的な責任だった。

＜＜生理学＞＞

アダムとイブは、繁栄し協力的なネアンデルタール人の一団の中で生まれたと考えることができる。アダムとエバには生物学的な父と生物学的な母がいた。これらの両親はネアンデルタール人の中でも最も発達していて、最も高い地位、おそらくリーダーでさえあったと推測することができる。

すべての人間に普通のことだが、最初の二人の人間は、助けなしでは生きていけない新生児として生まれ、ネアンデルタール人の母によって母乳が与えられた。

成長過程で、彼らは外敵から守られ、食べ物を与えられた。彼らはネアンデルタール人の子供たちと遊び、仲間の生き方を教えられた。彼らが能力の点で仲間と変わるところはなかったのは６歳を過ぎるころまでだった。そのとき、彼らは仲間を追い抜いた。

特に人間の子供はロゴスから受け継いで、文法や構文をもつ言語、ピジン語から本当の言語を創りだす生来の能力を持っていた。よって、アダムとエバはネアンデルタール人には使えない洗練されたレベルの言語、自分自身の言語を創りだしていた。それは“ur-language”と呼ばれるかもしれないが。最初の人間は親切で協力的な痴愚者の中で育つ二人の貴重な子供だった。ネアンデルタール人は人間の基準からすれば痴愚だったが、彼らは意図されたように完全に機能し、よい生き方について自身の心得を持っていた。

＜＜天使の役割＞＞

多くの宗教は、統一主義も含め、人間の起源の物語に神と人間だけでなく、天使も含めている。彼らはたいてい神の助け手であり、補助者だとみなされている。

どのような助けが創造者である神にとって役立つものだっただろうか？太陽という存在が可能なように、電磁気力と万有引力をちょうどバランスさせるところをよく計算してはじき出すことではもちろんない。

アダムとエバについて言われているすべてにおいてノーだが、神のために天使がなし得る最も役立つことは、神自身ができないことである。例えば、

１、アダムとエバを生むこと。

２、彼らに母乳を与えること。

３、彼らをライオン、トラ、熊などから守ること。

４、彼らを離乳させ、栄養ある食べ物を与えること。

５、彼らに用の足し方を教えること。

私たちは天使はアダムとエバのためにすべてのことを行ったネアンデルタール人に対する表象であるとの結論に達する。創造当初から神とともにいたという天使の概念は２段階創造と、簡単なものから複雑なものへと段階的に現れてきたことと矛盾する。天使は人間よりも劣っているが、最初に現れたのではなかっただろう。統一思想はロゴスとともに果たす役割を天使に与えていないのである。

われわれが思い描く天使の姿は、システィーナ大聖堂の絵ではなく、むしろネアンデルタール人の立体模型である。

聖書で神、アダム、エバ以外にいたという唯一の他の存在はルーシェル。アダムとエバに影響を与える位置にいた天使のリーダー、天使長である。

これまで述べたことから、私たちは、ルーシェルは最初の人間を生んだネアンデルタール人男性だということができる。つまり、ルーシェルはアダムとエバの生物学的父だというのである。アダムとエバを育て、アダムとエバを守るために戒めを与えたのも彼だった。

ルーシェル、その親切で愚かな父は美しい子供たちを大好きになるよう、神の計画の中で意図されていた。その男親のネアンデルタール人がもっていた愛は、神の意図通りバランスがとれ健全なものだった。アダムとエバはこの環境で成長・発達し、成熟して創造目的を完成するようになっていた。

まず、私たちは、神が彼の最初の子供たちに意図したことを議論する。そして、何が間違って、破壊された愛の力に人類が感染するようになったのかについて議論しよう。

＜＜完成された創造＞＞

アダムとエバは、神が愛するように愛し、無条件の愛をもって完成するようになっていた。彼らは、愛が成熟するまで、彼らの自由な創造性を用いて、愛の受容能力の段階を通過することになっていた。

問題なくここを通過できるよう導くために、聖書の例え話は、神が戒めを与えたと記している。その責任は簡単なことで、ただ従うことだった。その戒めは「家にいなさい」というのと同じくらいシンプルだった。この警告が親のネアンデルタール人男性から来るのも当然だったろう。

これは、「二人では良い仲間、三人では仲間割れ」という金言と、この性的暴行の時代に、聖職者や教師がいつも他の人と同席するようアドバイスされる理由の背後にある原則である。これは私的なことと公的なことの間の違いである。このシンプルな戒めへの間接的な支持は、ルーシェルの抑えがたい愛の衝動がどのようにして起きたかを議論したときに、統一主義の早期の組織化の中で与えられている：もしアダムがもっとエバのめんどうを見て、彼女と多くの時間をすごしていれば、このようなことは起きなかっただろうというものだ。

この均衡のとれた状況においては、ルーシェルは彼の子供たちの光り輝く姿をまばゆく思っても厄介なことは起こらず、アダムとエバが真の愛で１つになる中で創造目的が完成されただろう。

簡単に言えば、戒めは彼らをトラブルから守るため、安全にしておくためだった。この状況においては、彼らの人格、愛する能力、彼らの精神は、自己愛から相互愛を経て、無条件の愛、神の愛へと自然に成長していただろう。自己中心の精神から、作法と生命の精神を経て、神聖なる精神へと。彼らは地上で生き、子供たちや孫たちを育て、肉身を脱いで、霊界へ旅立っただろう。霊界では真の愛の圏内、つまり天国で神とともに永遠に暮らすことになっていた。

霊界の本質、その重要な側面、科学の最近の発展との関係は前のＵＴＩ論文で議論されている。

アダムとエバが真の愛で子供らを育てていれば、もはや戒めの必要もなく、子供たちを厄介なことから守ることができただろう。

人類は産み増え、ネアンデルタール人たちの生まれながらのリーダーとして、真の愛の文化を発展させただろう。

＜＜原人の家畜化＞＞

この見方についての他の驚くべき示唆は、家畜化された最初の動物は犬ではなく、ネアンデルタール人だということである。ネアンデルタール人は、生まれながらの僕の階級であり、真の愛の人間は生まれながらの貴族であろう。多くの余暇の時間を持ちながら、人間は急速に農業、科学、豊かな芸術を発展させただろう。

生まれながらの、代々受け継ぐ貴族と僕の階級をイメージすれば、人類歴史における異常な奴隷の無数の例を連想しがちだ。白人が黒人を鞭打ったり、あるいは日本人支配者と韓国人弱者のイメージは人間を奴隷にしようとしたまだ遠い過去ではない２つの例だ。真の愛の関係は、堕落歴史からの身震いを誘うような例とはまったく異なる。

人間の主人と家畜化されたネアンデルタール人の関係は、ジョーと彼の犬ラッシー、ロン・レンジャーと彼の馬シルバーによってアメリカのテレビで描かれたような理想的なものである。そのイメージは、主人が奴隷を鞭打っているようなものではなく、対話したり、皿をとったり、用便もしつけられた犬のイメージだ。

‘奴隷の反乱’はペディグリー・ドッグの反乱が考えられないのと同じくらい考えられない。真の愛の文化は地上を満たし、銀河系全体に広がっただろう。

この拡大のために、神が星々の間に道を用意していたとみることができる。１つのあり得る道は、物理学に関する前のＵＴＩ論文で議論されている。

＜＜何が間違ったのか？＞＞

この愛にあふれる、ゆったりとした文明は現れなかった。代わりに出てきたのは、真の愛はなくすべての人間が自分のために生きているような粗野な文明である。

家庭の機能障害は当たり前のことになったーリア王や多くのギリシャの古典が例である。それは、‘父と母を敬え’という言葉がが聖なる啓示として注入されなければならない文化だった。

人生は荒れ、獣のようになり、そして短かくなった。その時代の精神は、奴隷と人間の犠牲についての映画の中で恐ろしく再現されている。

統一主義は、人間の堕落に２つの段階があったと述べる。

１、アダムが戒めに従わなかった。実際、聖書は彼は出かけて、すべての動物に名前をつけたと記している。彼は家にいなかった。父のネアンデルタール人はエバだけと残され、恋に陥る。

２、ルーシェルは方向性の間違った愛の力によってサタンになり、この状態でエバと性的関係をもった。

アダムが従わなかったので、ネアンデルタール人の酋長は、魅惑的な、美しい若い女性、エバとだけ残された。これは不安定な状態で、ルーシェルのエバに対する愛は歪んで肉欲に変わったのである。彼の心は前には共鳴していたロゴスとはまったく関係のないものに満たされていた。

いまや私たちは避けられない問いをしなければならない。この男親が若い女性とどんな種類の性的関係を持ったのか。どんな種類の性的関係がエバに残忍な仕打ちをし、その子供、ひいては今日に至るまでの子孫に残忍な仕打ちをもたらすことになったのか。

これに答えるために、私たちは、父親による娘のレイプが非常に、至るところで非常に深刻な頻度で発生し、重大な結果をもたらしていることについて心理学の知見を検討したい。

＜＜子供のレイプ＞＞

父親による娘のレイプが増えていることが知られるようになったのは、おそらく最も良い時代においてだけである。もっと野蛮な時代においてはもっと高頻度で起きていたと推測できる。

北米では、ほぼ15％から25％の女性が子供時代に性的に暴行された。ほとんどの性的暴行者は犠牲者との知り合いである。ほぼ30％が子供の親族である…。ほとんどの性的暴行は男性によってなされ、最も多い近親相姦は父親、あるいは義父によるものである。

父親という存在によってレイプされた少女の精神と心理に対する結果は、危機的で重大なものである。

子供のレイプは短期的な害のみならず、後の人生における精神病理も含め、長期的な害を与える。精神病理学的、情緒的、心理的、社会的影響は、うつ病、外傷後ストレス障害、不安、食欲不振、自尊心の欠如、解離性不安障害などを含む。さらに、一般的な心理的ストレスと身体化障害のような障害、ノイローゼ、慢性痛、性的非行、学習障害、薬物乱用などの非行、自己破壊的行動、動物虐待、成人してからの犯罪と自殺…なども挙げられる。成人での繰り返しの虐待あるいは新たな虐待につながる発達への長期的なネガティブの影響はまた、子供のレイプと関係している。害のリスクは、その暴行した者が親族であれば、もっと大きくなる。

父、叔父、教師、聖職者らによるそうした性的暴行が白日の下にさらされるうよになってきたのは今日的な現象である。

ほとんどの子供は彼らが知っていて信頼している人によって暴行されている。３つの州での研究によると、レイプ未遂にあったとされる12歳以下の子供の96％はその加害者を知っていた。加害者の４％が見知らぬ人、20％は父親、16％は親族で50％は顔見知りか友人だった。

＜＜機能不全の血統＞＞

堕落の結果は、聖書が記しているが、人間が大変な苦労して生活の糧を得なければならないという予言である。あなたのために大地は呪われている。苦役をして食べるようになる。もはや、生まれながらの僕の階級はありえない。ネアンデルタール人は神の愛で家畜化されたのではなく、数千年の間に野蛮な堕落した人類によって完全に殲滅され、食べられたりさえしたのである。

＜＜逆転された支配＞＞

人間の脳はロゴスの表出の1つのステップとして進化においてそれぞれ出現したモジュールの階層に組織化されている。一番底には、腸神経系がある。それは脳幹と多量の、散らばっている場合でもネットワークになっている神経節だ。神経節は内部器官に広がっている。この部分は自己保存に関係しており、魚の時代に登場し、爬虫類のときに完成された。

この上にあるのは、家族レベルまで愛する能力をもつ哺乳類の脳である。さらにこの上にあるのが、霊長類の脳で、氏族レベルまで愛する能力がある。この上にあるのが原人レベルの脳で、民族レベルまで愛する能力を持つ。この階層の一番上にあるのが、普遍的な愛の能力をもつ人間のモジュールである。

堕落のトラウマはこの階層を逆転させ、自己中心的な腸神経系が支配するようになった。偶然にも腸神経系のほとんどは小腸付近の空のチューブであり、それは蛇をサタンの適切なシンボルにしている。これが、私たちの創始者が「あなたの体があなたの敵だ」といつも警告している理由だ。人間レベルと腸レベルが全体の支配権をめぐって闘争しているのだ。

＜＜復帰＞＞

機能不全のサイクル、愛することができなくなった状態は、世代から世代へと受け継がれてきている。復帰の歴史はこのサイクルを断ち切って、この恐ろしい状態から人間を導き出す神の努力である。不健全のサイクルは、真の父母の登場と本来の理想がスタートすることによって断ち切られるだろう。

この理想を復帰する神の仕事は、今なお物事の背後にあるロゴス、人間の責任分担、そして、先祖の功労、罪の逆のことによって縛られる。

このトピックは現在の科学の範囲を超えており、宗教的な観点からより適切に扱われる。